

# ワケ カタチには理由がある(40)

## ～ノースロップP-61Aブラックウィド～



【疾風と。単発機と双発機の違いはあるものの、同じ戦闘機とは思えない大きさである→】

本機は米国陸軍の双発夜間戦闘機で、戦闘機としてはとても大きな機体でした。全幅は20mもあり、全幅11mの疾風と比べると、その大きさに驚かされます。お腹に20mm機銃を4丁装備して、その攻撃力はとても大きいものでしたが、さらに後期型の機体は、これに加えて背中に12.7mm機銃を4丁連装した回転砲塔を装備しました。この機体は、ノースロップ社として大戦中唯一、実戦機として採用された機体ですが、ノースロップ社を率いるジャック・ノースロップはこの機体で会社経営を安定させる一方、バックヤードではXP-56やXP-79等を試作して、自らの夢である無尾翼機の実現を追い求めていました。我々日本人から見ると当時の米国の余裕と豊かさを感じさせずにいられません。なお、この機体、これだけの大型機ながら運動性はとてもよかったようで、決して大型＝大味な飛行機ではありませんでした。ドーム内に収められたパラボラアンテナや、主翼上面にポップアップするエアブレーキなど数多くの新機軸が盛り込まれ、当時としては万能飛行機と言ってもよい機体です。天才設計者ジャック・ノースロップ関わった名機の一つとなりました。

### 【模型について】

香港のドラゴン(DML)製1/72のインジェクションキットです。新しいキットではありませんが、さらに古いフログやエアフィックスのキットに比べれば、キッチリとした出来で作りやすいキットです。この作品の塗装はヨーロッパ戦線のものですが(疾風を隣に並べるのは場違いでしたw...)、太平洋戦線にも投入されており、真っ黒に塗装された機体が沖縄の伊江島(「ちゅらうみ水族館」から沖に見える)の飛行場に駐留し、日本軍の夜間攻撃の防衛に当たっていました。(中川裕幸 2021年8月)